2022年度　学校評価総括表　　伊丹市立鴻池小学校

教育目標	ひとみ輝き　笑顔あふれる　鴻池小学校
重点プラン	〇確かな学力の育成　　〇豊かな人間性・社会性の育成　　〇たくましい心身の育成

項目		重点項目	具体的施策	達成目標	自己評価	成果と課題	改善策	学校関係者の評価
学力の向上	授業改善と基礎基本の定着	①「主体的・対話的で深い学び」の視点での授業改善 ②基礎的、基本的な知識・技能の定着	・児童の実態に応じた授業づくりの実施 ・教員が普段の授業を参観し合える環境づくりの促進 ・国語・算数の基礎的、基本的な知識・技能の定着に向けた朝学習の質の向上 ・宿題や自主学習等の課題に対する評価及び支援	・教員アンケートから「授業力向上のため、自身の授業改善に努めている」について90%を占める。 ・教員アンケートから「教員に開かれた教室になっている」について90%以上を占める。 ・教員アンケートから「授業改善に努めている」について90%以上を占める。 ・児童および保護者アンケートから「課題取組達成」について90%以上を占める。	A	・授業力向上に関する教員アンケートでは、達成目標を上回っている。教員自身の授業改善に対する意識が高まっている。 ・開かれた教室に関する教員アンケートでは、達成目標を上回っている。また、授業改善に関する教員アンケートも達成目標を上回っている。教員全体で授業を共有しながら授業改善を行おうとする意識が高まっている。 ・朝学習に関する児童アンケートの結果では、児童自身がやるべきことを意識して取り組む児童が多いことが明らかとなった。 ・課題取組達成に関する児童および保護者アンケートでは、どちらも達成目標に達している。	・教員自身の自己研鑽を高めるため、引き続き自主的研修会の実施や校外で行われる学習会や研修等の情報提供を行う。 ・一人の児童をたくさんの教員の目で見る意識を高め、児童の実態を共有することや教員同士で授業観や方法等の交流を図る機会を引き続き設けていく。 ・朝学習に関しては、引き続き国語や算数の基礎基本の学力定着を図るための時間として行っていく。 ・計算力の向上が本校の課題の一つであることから、各学年ごとで定期的に計算確認テストを実施する。またそこから明らかとなった課題解決に向けて児童が自主的に取り組めるようにデジタルドリルを効果的に活用していく。	・「わかる」「できる」ということが大切である。定着するよう基礎・基本の定着を期待する。 ・教員同士が授業を見せ合い、学ぶことによって指導力を高めるとともに、一人一人の子どもの様子を複数の教師で見取り、共有することは大切なことである。 ・基礎・基本の学力の定着をめざし、学年が歩調を合わせて朝学習に取り組むことを期待する。 ・定期的に計算確認テストを実施することについては、子ども一人一人の状況を把握する上で大切なことである。是非取り組んでほしい。 ・計算確認テストを実施し、できていない児童への支援を期待する。 ・図形や単位、速さなど基本的な問題についても、定期的にふり返りを期待する。
	学習意欲の向上	③全ての児童の可能性を引き出す、個別最適な学びと協働的な学びの実現 ④学級を基盤とした児童理解と学級活動の充実	・学ぶ意欲を持たせるために課題設定を工夫 ・言語活動や交流・体験活動を通した表現力の育成 ・他者との協同により考えを広げ深める学習の充実 ・身につけた力を自覚できる振り返りの時間の確保 ・タブレット等ICT機器の積極的な活用の促進 ・学級力アンケートの全学級実施とその活用の工夫	・児童アンケートから、「教師の授業の工夫」や「児童自ら学ぼうとする意欲」について90%以上を占める。 ・各学級で年間6回の学級力アンケートを実施し、それを生かした学級経営を行う。	A	・教師アンケートで「授業改善に努めている」は100%、他教科に生かそうとしている」では96%と力リキュラムマネジメントを意識している結果だった。 ・児童アンケートの「先生は教え方を工夫している」は95%と、90%をこえ、「自分から学ぼうとする意欲はありますか」の問いでは91%と、教師の授業改善や工夫が児童の意欲にもつながっている。 ・今年度から全学級で年間6回（5月、7月、10月、12月、1月、3月）の学級力アンケートを全学級で実施した。また、それを生かして学級力向上に向けた話し合いを学級会で行った。学級力アンケート実施に関する児童及び教員アンケートでは、9割以上の好意的な評価を得られた。	・ペアや班での話し合い活動を工夫して行い、考えを伝え合う場を多く設定する。 ・学習後に自分自身の学びをふり返る時間を取り、次の学習への意欲向上につなげられるようにする。 ・次年度も学級力アンケートは継続して行っていく。また、その結果を活かす方法については、学年会や自主的研修等を通して各学級での取組を情報共有する。	・「わかる授業」を最優先に子どもたちが意欲的に学習するために、課題設定やめあて、ふり返りを大切にした授業に取り組むことが大切である。 ・子どもたちが学級づくりの主人公となって学級力を高める取り組みは素晴らしい。自分たちの学級の様子を自己評価することが、仲間づくりや居場所づくりにつながっている。 ・学級力の向上を図りながら、外部との交流（異学年、地域、幼稚園、特別支援学校、出前授業）を積極的に実施していることは、子どもたちの力となっている。引き続きお願いしたい。 ・日々学級目標に立ち返り、子どもたちが真摯に学級目標を考えることも大切かと思う。
		⑤読書活動の充実	・図書館を開放し、いつでも本を手にすることができる環境を整える ・家庭との連携を図り、家庭に於いても読書をする時間を確保する	・週1回の朝読書の徹底を図る ・児童及び保護者の「読書推進」の意識を高めていく。	B	・学期ごとに目標冊数を設定したことによって、児童の「もっと読もう」という読書への意欲につながった。PTAと連携を取り、達成賞を出すこともできた。 ・読書週間では、教師や委員会の児童による読み聞かせも行い、本に親しむ機会となった。 ・教師や児童からの「おすすめの本」を紹介することによって児童の読書の幅が広がった。 ・家庭での読書の習慣がついていない児童がいることが課題である。	・今後もPTAとも連携を取り合って、引き続き、家庭でも読書推進を呼びかけていく。「平日は、学校で。週末は、家庭で。」読書ができるよう、働きかけていく。 ・児童のニーズにあった書籍購入を行い、図書館の充実を図ると共に書籍紹介や新刊掲示の工夫等、読書意欲を高める取組を行っていく。	・教師や委員会の子どもたちによる読み聞かせを継続するとともに、読書ボランティアを募り、新たな取り組みを図ってはどうか。 ・朝読や昼読など、時間を設定し、本に親しむ時間を設けてはどうか。 ・家庭での読書が少なくなるのには、テレビ、スマホなどの要因によるところが大きい。家庭で親子読書や低学年の子どもへの読み聞かせなど、家庭学習での取り組みが必要である。
	特別支援教育の推進	⑥個に応じた支援計画とその実施	・支援が必要な児童の教員間の共通理解の徹底と適切な支援の実施	・児童のニーズに応じた組織的な支援体制の構築を図る ・教員間の共通理解を目的とした研修会を年2回以上実施する。	A	・学習支援員と情報を共有し、個々の児童に応じた指導をできた。 ・コンサルテーションでは、児童の特徴に合った支援を考えることができた。 ・研修会を年間2回実施し、配慮が必要な児童や、その支援方法等について職員全体で共有することができた。 ・ケース会議を開き、児童の実態把握を職員全体で行うことができた。 ・学校間交流（3年）及び校区間交流（3年・5年）を実施することができた。	・今後も研修会を通して児童の実態把握や支援方法等について職員で共通理解を図っていく。 ・情報交換したことが生かさせるシステムを構築し、教職員全体で児童を見ていく意識を高める。 ・交流については、特別支援学校と相談しながら実施内容について検討していく。	・支援を必要とする児童に対する理解を深めるとともに、支援を必要とする児童への対応スキルを高めることは大切なことである。 ・支援学校との学校間交流については、一人一人の子どもを大切にすることにつながることで継続して取り組んでほしい。
豊かな心・健やかな体	生活指導の対応	⑦いじめや問題行動の未然防止と、早期発見、早期対応の徹底	・いじめアンケートや児童アンケート等の実施及び実態把握 ・児童の実態把握に努め、職員間での情報共有及び組織的対応を行う	・いじめアンケートや児童アンケート等の結果を基に、教員全体で実態把握及び情報共有を図り、適切な対応を組織的に行う。	B	・問題行動の未然防止や早期解決に向けて、月に一回の児童の様子を話し合う場の設定や、いじめアンケートを活用した指導をすることができている。 ・生活目標の各教室での呼びかけや、放送による児童からのアナウンス、教職員による声かけを続けているが、廊下を走ったり廊下で遊んだりする児童がなかなか減らないことが課題である。	・生活目標を意識した指導や、いじめの未然防止につなげていく。今後も引き続き児童の実態把握や職員間での共通理解を図っていく。 ・委員会活動や児童集会での発表等、安心安全な学校づくりに児童にも積極的に参画させていく。 ・児童が中心となって学校生活における課題及びその改善に向けた活動を行うための委員会を新設する。	・いじめ問題を含め、問題行動の未然防止や早期解決のために、児童に寄り添った指導とともに教職員の情報の共有を今後も図っていってほしい。 ・何でも言い合える仲間づくりや学級づくりが大切である。 ・児童が中心となって学校生活における課題やその改善に向けて積極的に取り組む活動を行うことは素晴らしいことである。
	道徳教育の充実	⑧豊かな心を育てる道徳教育の推進	・全教育活動を通して、子どもの自己有用感を高める取組について指導及び支援を行う ・考え、議論する道徳に向けた授業改善の実施	・児童アンケートから、「自己有用感が得られた」ことについて80%以上を占める。 ・児童アンケートから「道徳科の授業で、自分自身を見つめ、よりよく生きるための心について考えようとした」について80%以上を占める。	A	・学年間交流や学級活動の充実を図ることにより、自己有用感を高めることに繋げることができた。 ・研究授業等を通して学校全体で授業作りについて考えることができた。 ・児童にとってより深い学びが得られる授業作りについて引き続き検討する必要がある。	・引き続き自己有用感を高められる取組を職員で情報共有したり、再検討を行う必要がある。 ・「考え、議論する」道徳科授業の実現に向け、引き続き学年での検討や研修会等を行い、児童にとってより深い学びのある授業づくりを目指す。	・子どもたちの人の役に立ちたいや認められたいという自己有用感の高まりを感じる。そのことを通じて、自分に自信が持てる自尊感情を高めることが大切である。 ・子どもの心を耕し、主体的に自分の考えを言える授業を今後も期待する。

体	健康教育の充実	⑨たくましい心身の育成	・運動する楽しさや喜びを体感できる体育科授業の実施 ・早寝・早起き・朝ごはんの確立	・児童アンケートから「体育科の授業で運動する楽しさや喜びを感じている」について80%以上を占める。 ・「朝食を食べている」について、子ども及び保護者アンケート共に、90%以上を目標とする。	A	・児童アンケートでは、目標値を上回る94%が「喜びを感じている」ことが明らかとなった。ただし、実際に体力や運動能力が向上しているかについては引き続き検証していく必要がある。 ・朝食に関する児童及び保護者アンケートでは、達成目標に達している。規則正しい生活習慣に関する保護者アンケートでは8割強の保護者が身についていると感じていることがわかった。	・体を動かしたり、友達と一緒に運動をする喜びを感じられるような体育の授業を引き続き行っていく。 ・児童の実態に応じて各学年のカリキュラムを見直し、学習内容及び学年の到達度を意識した授業づくりをしていく。 ・規則正しい生活は、健康な心と体づくりにもつながり、学習態度にも大きな影響を与えることから、PTAとの連携を図りながら引き続き啓発に努めていく。	・縄跳縄とびの取り組みによって、子どもたちが縄とびの技を自信を持って披露していた。取り組みの結果だと感じる。
開かれ信頼される学校園	情報開示	⑩積極的な情報収集と適切な情報発信の実施	・学校通信やホームページ等を活用した学校教育活動の積極的な情報発信	・保護者アンケートから、学校情報の発信についての満足度」について90%以上を占める。 ・状況に応じて、休校や学級閉鎖等の学校情報を積極的に発信する。	A	・学校情報の発信に関する保護者アンケートでは、達成目標を大きく上回っている。行事だけでなく、普段の学校生活についても発信できており、それについて保護者から良い評価を得ている。	・地域に開かれた学校として引き続き学校通信やホームページ等を活用した学校教育活動の積極的な情報発信を継続していく。	・学校だよりやホームページでは、学校での日々の子どもたちの様子を知ることができた。 ・ホームページが毎日更新され、子どもたちの様子を知る機会として楽しみにしている保護者がたくさんいる。引き続き積極的な情報発信を期待する。
	安全・安心な学校づくり	⑪新型コロナウイルス感染症防止に向けた対応の徹底	・全ての教育活動において、新型ウィルス感染症防止に向けた対策について職員内での共通理解及び対応	・児童および教員アンケートから、「感染症防止対策の徹底」について90%以上を占める。	A	・職員間で感染対策について共通理解を図り、その対策を全ての教育活動に活かすことができた。	・今後も状況に応じた感染対策を講じつつ、教育活動に応じて、開催時期、開催場所、開催方法等を確認しながら実施していく。	・新型コロナウイルス感染症への感染防止対策を講じながら、学校行事や校外学習、体験活動など実施でき、子どもたちが成長できた。
		⑫非常時における学校の危機的管理体制の充実	・避難訓練の工夫・改善 ・自然災害や緊急時等による休校等における情報の発信 ・安心、安全に過ごせる環境づくりの促進	・状況に応じて、適切に対応できるよう、避難訓練を計画的に実施する。 ・状況に応じて、休校や学級閉鎖等の学校情報を発信する。 ・児童にとって安全・安心な場所であるようによりよい環境整備に努める。	A	・避難訓練に関する児童アンケートでは、90%の児童が状況に応じた行動を意識していると答えており、避難訓練に対する意義を理解して取り組むことができているといえる。 ・自然災害時における休校の基準を年度当初に、学級閉鎖等の基準や情報はその都度発信することができた。 ・全校一斉の避難訓練を、毎学期行うことができた。 1学期・・・火災 2学期・・・不審者対応 3学期・・・地震・引き渡し ・月に一回安全点検し、危険箇所の修繕を行うことができた。	・引き続き、避難訓練の意義や状況に応じた行動および避難経路等の確認等をおこなっていく。 ・引き続き、手紙やGoogleClassroomを用いて適宜情報発信を行う。 ・引き続き、自分で命を守る力を育てる訓練を行っていく。 ・安全点検を引き続き行い、危険箇所を確認して早急に修繕をする。	・実際の場面を想定した防災訓練や避難訓練を通して、自分の命は自分で守るということを、子どもたち一人一人に意識させることが大切である。 ・登校時の見守りを繰り返す中で、放課後に遊んでいるときでも声をかける児童が多くなり、地域と子どもの関係づくりが進んでいる。
	教員のワークライフバランス	⑬教職員の適切な働き方の推進	・PDCAサイクルによる業務改善の実施 ・週1回の定時退勤日の設定	教員アンケートから、「ワークライフバランスの意識の定着」について80%以上を占める。	A	・ワークライフバランスに関する教員アンケートでは、達成目標を大きく上回っている。教員自身の働き方に対する意識がとても高まっている。	・ワークライフバランスの意識を高めることが児童のよりよい学びを保障し安全を守る教育につながることを意識した上で、引き続き行事や会議等の精選、校務分掌の仕事内容の見直し等を図る必要がある。	・教育内容の充実を図りながら、効率的な時間の使い方を意識した働き方改革を推進することで、子どもと向き合う時間の確保につながっている。

自己評価の基準　A：目標を上回った　B：目標どおりに達成できた　C：目標をやや下回った　D：目標を大きく下回った

学校関係者評価総括
・学校における課題を明確にし、具体的な方策を立て、学校教育目標の具現化に向けた取り組みが行われている。
・子どもたちが主体的に発言をしたり、友だちの意見を聞いたりと活発に授業に参加できている。
・子どもの学力保障に向けて、授業改善に努めるとともに、基礎・基本の徹底のために取り組んでいる。
・新型コロナウイルス感染症への感染防止対策を講じながら、学校行事や校外学習、体験活動など実施でき、子どもたちが成長できた。
・「チーム鴻池」となって組織的に教育活動に取り組んでいることが感じられる。
・学校だより、ホームページ等で学校としての考え方や、日々の教育活動の様子を保護者や地域に丁寧に伝えている。
・教育内容の充実を図りながら、効率的な時間の使い方を意識した働き方改革を推進することで、子どもと向き合う時間の確保につながっている。

次年度に向けた重点的な改善点
・自己有用感に裏づけされた自尊感情（自己肯定感）の育成を図る。
・主体的な学びを促すため、互いに協力し合い、認め合い、高め合う同僚性の意識が高い教師の育成に努める。
・授業における指導の工夫と効果的な家庭学習の充実を図る。
・PTAと連携を図りながら、読書が好きになるような仕組みや仕掛けを行う。

自己評価の基準　**A**：目標を上回った　**B**：目標どおりに達成できた　**C**：目標をやや下回った　**D**：目標を大きく下回った